かわいい…

テレビのニュースを聞き流していた時のこと。どこかの中学生のグループが、一人暮らしのお年寄りに手作りのお弁当を持って行ったという心温まる話題だった。私よりもさらに一世代か二世代上と見える女性が何か感想を言い、その後でマイクがお弁当を届けた中学生に向けられた。すると彼女が謙虚な表情でこう言ったのである。

「かわいい顔が見れて、よかったです」

私はびっくりして、改めてテレビに向き直った。画面には、それこそ「かわいい」という形容詞の見本のような、まだあどけなさの残る少女の顔が映っていた。けれども彼女が「かわいい」と言っているのは、もちろん自分の顔のことではない。そうではなくて、お弁当を届けた相手、たぶん八〇代後半かそれ以上の女性のことを指しているのである。

「かわいい」という言葉は、こういうふうに使うのだったかしら。何となく釈然としない思いで、私は幾つかの国語辞典を引いてみた。そのほとんどは、「同情を誘うようなものに対する、大事にしたいという感情」と「小さく幼いものを、いとおしく思う気持ち」という意義を掲げている。なかには〔原義は、ほうっておけば悪い事態になるのをそのまま見過ごせない、の意〕と述べた上で、「自分より弱い立場にある者に対して保護の手を述べ、望ましい状態に持って行ってやりたい感じだ」（新明解国語辞典）と

かわいい…

書いてあるものもある。

お年寄りは確かに大事にしなくてはいけないし、ほうっておけば悪い事態になってしまうこともありうる。だとすれば、一人暮らしのお年寄りについて「かわいい顔」と言うのも、あながち間違いではないという理屈もあるようなものの、しかし当の中学生はたぶんそういうつもりで言ったのではないだろう。

それで思い出したのだが、いまから十数年前、私の勤める大学で、ある年配の先生が憮然とした表情で教室から戻ってきた。そして独り言のように「女子学生に、先生かわいいって言われたのだけど、あれは私を馬鹿にしたのだろうか」と言ったのである。そう言いながらもいささか腑に落ちない表情だったのは、「先生かわいい」と言ったその学生が、決して馬鹿にしているとは思えないようすだったからに違いない。

「そうじゃないんですよ、先生。いまの若い子は好感が持てるものなら何でも、かわいいって言うんです」

私たち若い教員は（その頃は私もまだぎりぎり若い教師に組することが可能だった）、一生懸命に解説して慰めようとしたのだが、老教授はやはり一抹、納得できずにいるようだった。

私はその後、何人かの若い人にこの話をしてみたのだが、誰もみな一様に「ぜったいに馬鹿にしたのではない。ほめ

たのだ」と力を入れて保証した。テレビの心優しい中学生も、本人の気持ちとしては、ぜったいに哀れみの心で言ったのではないことは確かである。

それでもやはり、言われる側にしてみれば（今の私は年寄りサイドに立っている）、あまり嬉しくないような気がするのも事実である。今の日本の年配の者に対する気持ちのありようが昔と変わってきているのかもしれないなどと、ついあらぬことまで考えてしまう。

それはともかく、もし若い人たちの使う「かわいい」に同情や哀れみのニュアンスが皆無であるのだとしたら、多くの辞書は記述を変えるべきではないだろうか。

初出＝北國新聞「北風抄」二〇〇六年四月
ホームページ掲載＝二〇二四年一月二三日